U-history
CNEAS, Tohoku University
東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門（U-history）

東北大学

史の杜

FUMI no MORI

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニューズレター
No.13

Contents

◉ 古文書のひろば① …… 近代の大河原町と大泉家　―文書の整理作業を通じた成果と今後の展望―
◉ 古文書のひろば② …… 一農民が伝えようとした近世・近代の地域社会　―「歳々風雨物直咄集」―
◉ 地域との歩みのなかで① …… 白石城から北へ二里、内方屋敷に所蔵の佐藤家文書
◉ 地域との歩みのなかで② …… 荒武賢一朗・武田作一編『文政10年東北農村の御用留　―須賀川市桑名家文書から―』（東北アジア研究センター叢書第74号、令和5年（2023）12月刊）
◉ 広げよう、古文書の輪 …… 部門ホームページ掲載、資料目録・デジタルコレクションの紹介
◉ 上廣歴史資料学研究部門 2023年1月～12月

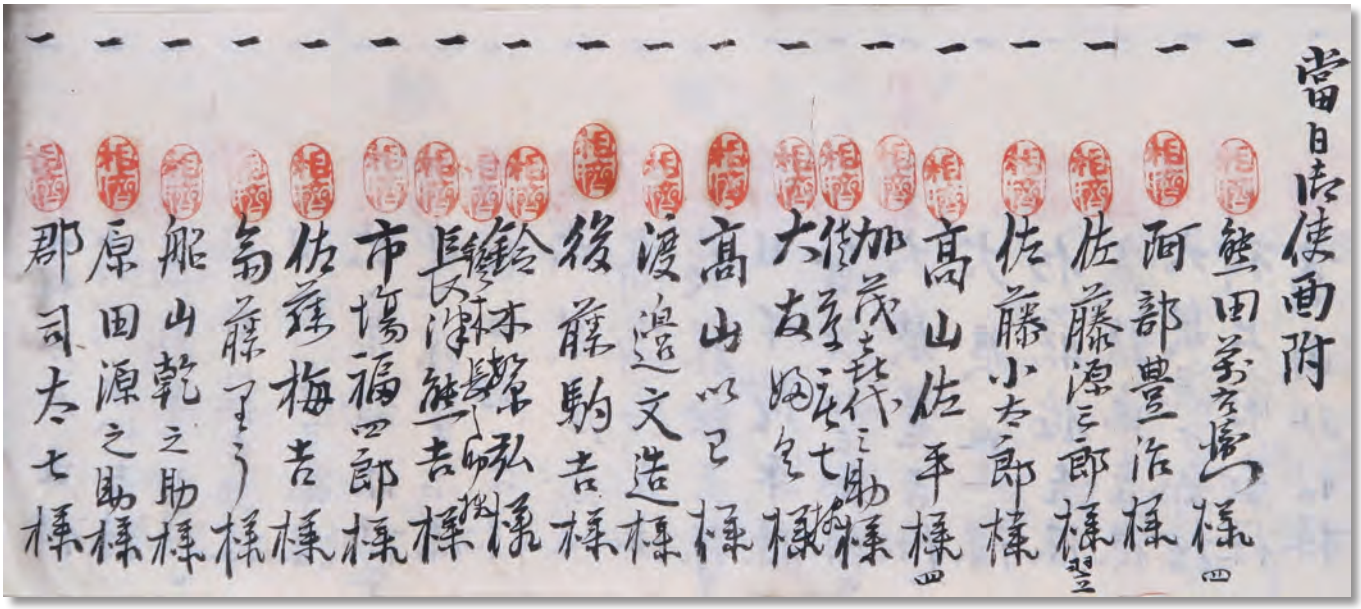
古文書のひろば❶

近代の大河原町と大泉家
―文書の整理作業を通じた成果と今後の展望―

本年度、当部門では大河原町大泉家の文書の整理・撮影作業をおこないました。史料群全体の性格や伝来の経緯は今後目録作成や追加調査などを通じて明らかにしていくことになりますが、今回は文書整理や撮影を通じて明らかになってきた点をいくつかの文書と合わせて紹介していきたいと思います。

まず、文書全体の内訳を見ていくと、領収証類や帳簿類のほか、農会の運営や収支をめぐる文書がまとまった数で残されていることを確認することができました。これらの文書をさらに調べてみると、明治期に大泉家関係者が農会の重役を歴任していたことがわかり、職務を通じて大泉家に残された文書類だと考えられます。さらに、他の文書からは明治12年（1879）に大泉家が大河原小学校の新築費用として金2円を寄付していたことがわかりました。このように、文書の整理を通じて近代の大河原町の発展における大泉家の貢献の様子を知ることができました。

ところで、大河原町と言えば、当部門で調査・研究を継続してきた佐藤屋（佐藤源之家）の文書がありますが、大河原町の有力者であった佐藤屋や当主の佐藤源三郎氏の名前も大泉家文書の中で多数確認することができました。例えば、明治44年の大泉家の婚儀に際する祝儀の芳名録に「佐藤源三郎」の名前を確認することができます（【写真1】）。もう一つ、大泉家文書の中には「第一回佐藤源三郎小作者改良米品評会」で大泉家関係者が五等を獲得したことに対する表彰状がありました。こうした文書類からは、大泉家の動向だけではなく、大河原町における家同士のつながりもみてと



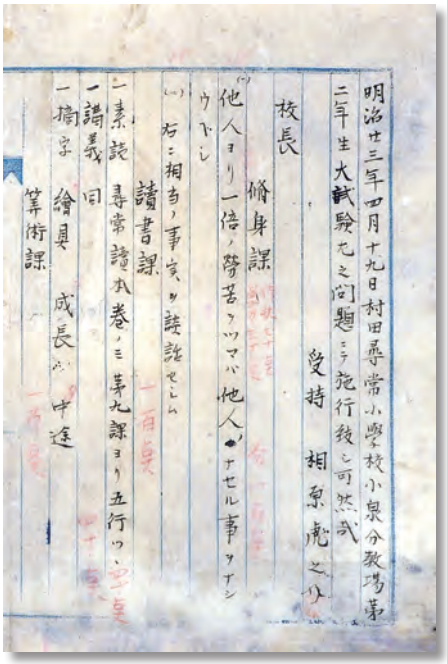
【写真1】大泉家関係者の婚姻の際の芳名録。右から３人目に「佐藤源三郎様」と記されている

ることができるでしょう。

このほかにも大泉家文書のなかには、刊行された書籍や新聞、大泉家の人々に宛てられた葉書など手紙類がありますが、特にまとまった数が残されていたのが学校に関する文書です。これは大泉家関係者が戦前から戦後にかけて県内の学校で教鞭をとっていたことから、同家に残された文書だと考えられます。また、学生時代の友人から送られた手紙の文面からは、同級生たちが学生生活を懐かしむだけではなく、社会に出てからも勉学に励み、知識を社会へ還元できるように互いに励まし合っていたことがわかります。実際、大泉家文書のなかには勉学に用いたノートや学術雑誌類も残されており、教師として教鞭をとる一方で、さらなる知識の習得にも熱心であった様子がうかがえました。

また、昭和20年（1945）に大泉家の家族が招集を受け徴兵されていますが、今回の文書整理を通じて家人の出征を控えた大泉家では同僚や知人を茶会に招待していたことが確認できました。戦局の悪化から華美な催しをおこなうことは難しかったと思われる中で、出征前に家族や同僚、知人と過ごす時間をもうけたいという思いがあったのではないかと推察されます。

今回整理・撮影作業をおこなった文書の中で目を引くのは、多数の下貼り文書です。これらは破損し、断簡となったものも多く、個々の文書の性格や前後の関係については今後の詳しい調査を待つしかありません。しかし、宛所が明記されたものを見ていくと「柴田刈田郡長」「宮城縣令」「大河原登記所」宛のもの、また「宮城縣柴田郡槻木村戸籍役場」と記された原稿用紙などが見られます。面白いものでは、【写真2】で示した文書があります。この史料も下貼り文書の中から見つかったものですが、冒頭には「明治廿三年四月十九日村田尋常小学校小泉分教場第二年生大試験左之問題ニて施行致シ可然哉」とあり、尋常小学校の試験問題の素案であると考えられます。これらの点から、大河原町周辺地域の役場や学校で出た反故紙が大泉家の襖や障子の下貼りに用いられたことが推察できます。



【写真2】下貼り文書の中から見つかった村田尋常小学校の試験問題の素案

このように、大泉家文書を見ていくと文書を所有していた大泉家の歴史だけではなく、近代における大河原町の発展の様子を見ることができます。今後は佐藤屋に伝来する文書類と比較検討などをおこなうことを通して、さらなる成果が期待できるのではないでしょうか。

（根本みなみ）

古文書のひろば ❷

一農民が伝えようとした近世・近代の地域社会
―「歳々風雨物直咄集」―

山形県長井市の「文教の杜ながい」には、平山村（現、長井市）の新野伊三太が書いた「歳々風雨物直（値）咄集」があります（【写真1】）。「歳々風雨物直咄集」は、宝暦4年（1754）から明治21年（1888）までのできごとや物の値段など地域社会の動向を記録したものです。筆者の新野伊三太は、「中野新野伊右衛門筆頭伊三太」とあり、平山村字中野の旧家伊右衛門家の子孫で、文化11年（1814）に生まれ、明治21年に死去しています。また、遊月庵和水と号し、「歳々風雨物直咄集」にも自作の和歌を挿入しています。伊右衛門家は江戸期には「村役」を勤め、伊三太は明治7年の地租改正のための土地測量に携わりましたが、詳しいことはわかりません。

現存する「歳々風雨物直咄集」は、①宝暦4年～慶応元年（1865）、②慶応元年～明治2年、③明治5年～明治8年、④明治12年～明治21年の4冊に分かれていますが、年号が途切れており、③の表紙には「伊三太七拾壱才明治五より　歳々風雨物直咄集　四」とあることなどから、他にも冊子があったと考えられます。かつて同市の小関信一氏が筆写したものには、③と④の間を埋める明治8年～明治12年の部分があり、昭和52年（1977）発行の『長井市史資料』第4号はそれを合わせて紹介しています。残念ながら、小関氏関係資料は現在不明です。

「歳々風雨物直咄集」①の冒頭には、世の中には「まれ成る事」「心ためし」「海道咄し」「見聞事」などいろいろあり、心に留め置きがたく、「不学之文字」は読みにくく「字落し」「かなおとし」がたくさんあるが、「恥かしながらもまれ成る事を書留て末々までかき残さんと心付、いろ〳〵之事を書留に御座候へハ、末巻迄読下し能々拝見仕へく、後乃世の人ニも御方廉々（粗々カ－筆者注）成る所ハ御免被下度候」と、執筆への思いが記されています。

記事内容を見ます。冊子①の前半は、伊三太が生まれる前のできごとで、宝暦の飢饉や野川洪水から始まり、国役普請見分人への返答事例や藩役人一覧など、過去の記録や聞き書きが紹介されています。天保期（1830～44）以降は、天保の飢饉や嘉永の旱魃、異国船来航以降の混乱や江戸人足など、大きなできごとを中心に当時の気候や物価などを記しています。冊子②は、慶応期（1865～68）に入ってからの物価変動や乱世の様子に始まり、戊辰戦争に大半のページを割いています。これらは、周辺地域や自藩のみならず全国各地の動向を含むものであり、その情報をどのようにして入手したのかが気になるところです。冊子③・④は、明治維新以後の新制度と地域の動向や物価などを年を追って叙述していま

【写真1】現存する「歳々風雨物直咄集」

す。ただし、新しい法令や制度の紹介は、御用留のような通達記録ではなく、伝聞・体験に感想を交えた自身の文章です。また、隠居者として世事を達観した表現も見られます。そうした記録の仕方が、明治維新に始まる近代地域社会の実相をよりリアルに映し出すことにつながっています。

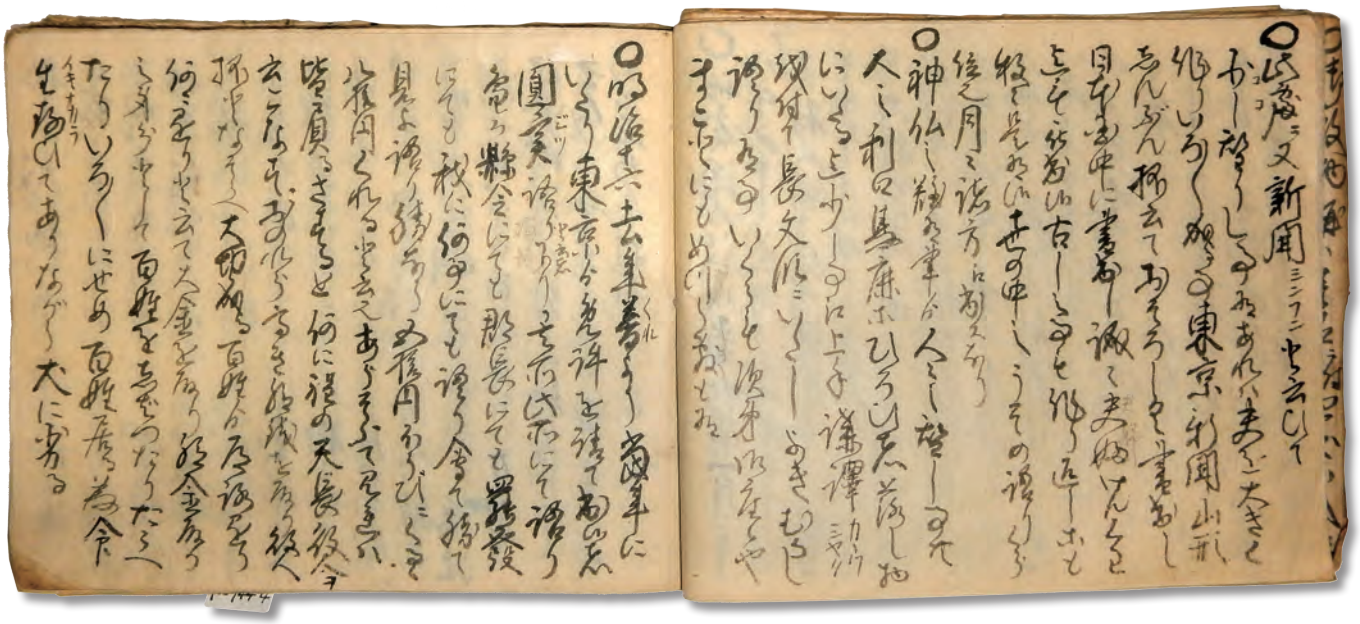
明治期の事例をいくつか紹介します。廃藩置県の際、政府肩代わりの借財が多い米沢藩で、藩主上杉茂憲が家臣に財産を分与したできごとでは、「取立之節、太政官役人是をほしくなり論に相成る、……御家中方ハ、いや是ハ太政官ゟもらひ請たる品に有らず、上杉様前々ゟため置被成、それを上杉様ゟもらひ請たると云」と、政府と藩の軋轢に触れています。農作業の目安がなくなった新暦については、「日数斗り閏月もなし、百姓見てハ何と不別、……新暦之下江旧暦付印」と不満を述べています。矢継ぎ早に出された「民風改正」の置賜県達には、「九拾六ヶ條之法度被出こま〳〵し、海道瑞さ小便もたれられずなり、衣服ノしりはしよりて行な、はだぬくな、又たんするな、下こへ江ふたしてかづげ抔いふ迄、……何事もわるき事すれハ後ハばち金取るゝ」と人々の息苦しさを述べています。明治12年の「はやり病」（コレラ）については、「此病にて人死スれハ、医者・羅發（邏卒ヵ）ト来りて、其家の者ニうばせて焼所江持行、其家の者にも不見薬懸ケて焼也、……人に見せぬ事にてハ訳有とて人々皆咄〳〵成りしが、……其肝を取りたとの咄し也、此肝外國ニ遣るなら千円位の咄し有」と、未知の病気をめぐり乱れ飛ぶ情報を伝えています。各地で発刊が進む新聞については、「少し替りし事有あれハ、夫を大きく作り……世の中之うその語りくら位也」と批判する一方、各地で演説会などを展開する自由民権運動については、「道路懸り何ニ懸り」と大金を取り百姓を責める役人をやりこめる「圓実語り」は、「百姓衆江ハ力を付る」と評価しています（【写真2】）。

ところで、私蔵の書である「歳々風雨物直咄集」の文章は、かな交じりで誤字・脱字が多く、時折方言で書かれています。警察官の前身にあたる「邏卒」は「羅發」と誤記し、「徴兵」については「長兵」と記して「長兵ノちやうの字まだしらなへ」と付記しています。方言表記では、「千貫文まよえ」や上述の「うばせて」などがありますが、山形弁特有の濁音化する事例は、「うづりやすぎ」「こど〳〵へぐ」「どぐ」「かづげ」など数多く見られます。こうした表記は、筆者の感情表現に欠くことができないもので、情報認知度を知る手がかりにもなります。残念ながら、先の『長井市史資料』第4号では、翻刻にあたりこれらを修正・編集した部分が多く、改めて原典を見直すことが求められています。

新野伊三太が後世の人々に伝えたいと書き残した「歳々風雨物直咄集」を、もっともっと活用したいものです。

※史料の引用では、中略は「……」とし、読点やわかりにくい表現にルビを付しています。

（長井市史編纂委員　山内励）



【写真2】「新聞」と「圓実（演説）語り」の記事

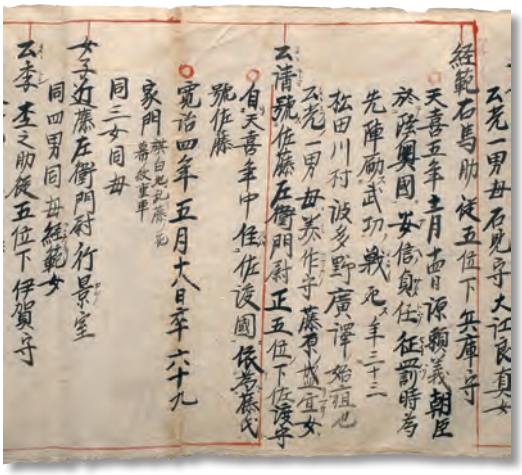
地域との歩みのなかで①

白石城から北へ二里、内方屋敷に所蔵の佐藤家文書

令和6年（2024）1月、荒武賢一朗・白石古文書の会編『白石片倉家中・佐藤家文書－宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む－』が発刊されました。刊行にあたり、白石古文書の会の細田紀明さんより佐藤家文書についてご寄稿いただきました。（編集）

内方（うちかた）佐藤家の歴史

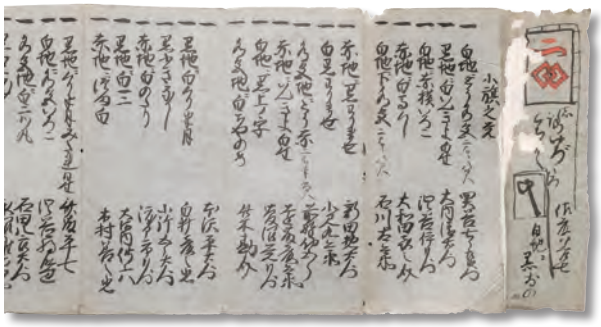
佐藤家所蔵の系譜によりますと、始祖は藤原鎌足とあり、11世紀半ばの天喜年中には、第14世藤原公光（ただみつ）の子息公清（ただきよ）が佐渡守として佐渡に赴任した際に、姓を佐藤と号したとされています（【写真1】）。その後、室町時代初頭には常陸国岩城氏の重臣として務め、応仁の乱以降は伊達成宗（しげむね）に仕えて出羽国長井庄に転居、永正元年（1504）直後、31世越中守定吉（さだよし）が縁戚の宮内氏（刈田郡北部10村領主）を頼って刈田郡宮村内方に移り住みます。この初代定吉から5代九郎右衛門までが宮内氏に仕えました。その後慶長年中、片倉景綱の白石入城により、5代九郎右衛門が召し抱えられて一番座の家格を得ています。のちに元禄年中、10代当主の出奔で知行召し上げの咎も受けましたが、11代から14代までの勤務功績が賞されて、安政6年（1859）に一番座復帰を果たしました。



【写真1】佐藤家系譜14世公光子息公清

片倉家中 佐藤家文書

佐藤家に現存する文書は165点ですが、『白石片倉家中・佐藤家文書－宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む－』では江戸時代末期までに限定して105点を選びました。数種の系譜と大坂冬の陣・夏の陣関連記録、元和年中の片倉家臣「小旗之覚」（【写真2】）以外は江戸中期以降の文書が大半です。内容は、①系譜書上から各代の武功実績、②知行宛行（あてがい）状（天明～元治期）、③天明～安政期の組士の役務（赤子養育方、街道通行人馬の対応）など、④士格に復活するまでの縁戚連名による嘆願、ほかに白鳥大明神との関わりや自家の婚礼記録も残されています。



【写真2】片倉家臣小旗之覚〈元和年中〉

片倉景綱入城と佐藤家5代九郎右衛門

慶長7年（1602）12月、片倉景綱の白石入城時の経緯が『内方佐藤氏代々記』などの系譜にある5代九郎右衛門の項に記されています。概略は「慶長7年景綱公白石城御拝領、同年秋九郎右衛門所へ伊達家領地の亘理より御移りになり御越年、慶長8年に御入城される、のちに〈金地に時雨之御屏風〉〈銀地に白鷺之御屏風〉合せて二双を新城主に献納仕る」とあります。この屏風は禅僧画家の雪村周継（せっそんしゅうけい）（生没年不明・安土桃山時代）の作で、景綱へ献納するまで佐藤家の秘蔵品として所蔵されていたものです。

鎌先温泉（現・宮城県白石市）の湯守一條家所蔵文書「白石城焚之記」の文中に「文政2年（1819）閏4月、城内から出火して老中之間に焼け移り、〈時雨之屏風〉と〈白鷺之屏風〉と謳われていた古画を持ち出すことができず焼失した」とありました（『近世東北の温泉史料－鎌先温泉一條家文書を読む－』東北アジア研究センター報告第25号）。この一條家文書に記載の屏風と、佐藤九郎右衛門が景綱へ献納した二双の屏風は同一品ではないか、と考えられます。景綱入城年には諸説ありますが、佐藤家系譜に掲載の「慶長8年に御入城」も一考に資するのではないでしょうか。

（白石古文書の会　細田紀明）

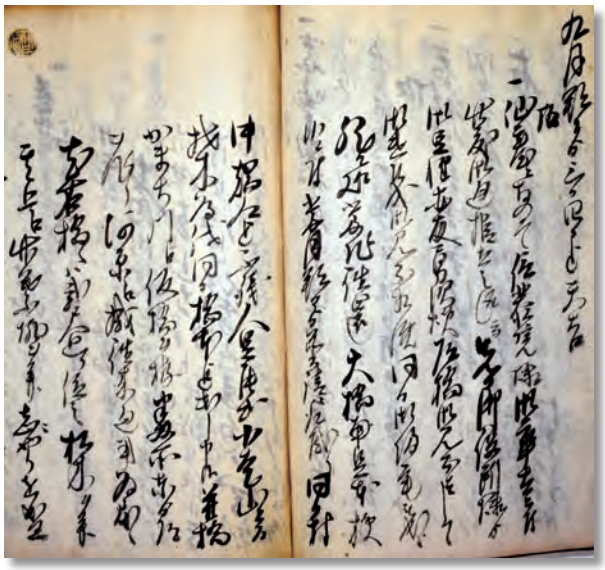
地域との歩みのなかで②

荒武賢一朗・武田作一編『文政10年東北農村の御用留 ―須賀川市桑名家文書から―』東北アジア研究センター叢書第74号、令和5年（2023）12月刊

令和元年（2019）から、福島県の須賀川市立博物館と上廣歴史資料学研究部門は同市に伝来する歴史資料の保全と活用を進めています。すでに調査に着手した文書群は10件以上におよびますが、そのうち桑名家文書は総数1,559点を数えます。部門ホームページには全体の概要を示す「須賀川市桑名家文書目録」と、画像を公開するデジタルコレクションに桑名家文書から5点を掲載していますので、ぜひ読者のみなさんにも御覧をいただきたく思います。

【写真1】『文政10年東北農村の御用留』表紙

主題にある「御用留（ごようどめ）」とは、江戸時代の村役人たちが領主からの法令や通知、または自分たちが役所へ提出した願書や届書を筆写した帳面のことです。村落と領主のやりとりをまとめているため、双方の意向や反応などを同時に読み解くことができます。陸奥国岩瀬郡滑川村（現・須賀川市）の庄屋を務めた桑名家には、毎年1冊の割合で作っていたようで現存するものは73冊にのぼります。そのうち、文政10年（1827）の1年分を武田作一さん（白石古文書サークル会員）が翻刻を進め、荒武と読み合わせをおこなう形で本書の原稿にしました。



【写真2】文政10年9月1日～4日　常陸府中藩の足軽が信恭院御通棺に際して道橋の調査を実施（「須賀川市桑名家文書」36）

滑川村は常陸国府中（現・茨城県石岡市）を本拠とする松平家の領地で、御用留には役所との連絡を密接にしていることがわかるほか、参勤交代などで奥州街道を往来する東北地方の諸大名家についても記されています。仙台藩に関する情報もいくつかみられますが、文政10年11月に11代藩主伊達斉義が30歳にして亡くなり、翌月に12代斉邦が家督継承をしました。御用留では、同年11月14日に「伊達藤五郎様賑々敷（にぎにぎしく）御同勢にて御登り遊ばされ候」と書かれています。伊達藤五郎は、仙台藩一門衆の亘理伊達家10代村氏（むらうじ）のことで、主君の容態が思わしくないため村氏が江戸へ馳せ参じたと考えられます。それより少し前の8月8日にも10代藩主伊達斉村の正室であった信恭院（紀州徳川家出身）が仙台で死去し、遺体は江戸へ搬送されました。沿道では「御通棺」に協力するため、道路や橋の補修や、通行時における村方人足の提供などをしている様子も理解できます。

本書を読み進めると、さまざまな取り組みや人々の活動ぶりが随所に見えてきます。みなさんにも御用留に関心を持っていただければ幸いです。

（荒武賢一朗）

広げよう、古文書の輪

部門ホームページ掲載、資料目録・デジタルコレクションの紹介

インターネットで資料の画像を見ることができるサービスが定着して久しくなりました。部門ホームページでも、昨年度より「デジタルコレクション」を開始し、調査・撮影作業を完了した資料画像を公開しています。ホームページの「コレクション」のカテゴリからご覧いただけます。また、「調査・研究」カテゴリの「刊行物・文書目録・研究論文（PDF）」では資料目録などをPDFで見ることができます。より多くの方々にご活用いただきたく、本稿ではホームページで公開している目録や画像についてご紹介します。

【表】では、現在ホームページで公開している情報をまとめました。資料目録については、部門で整理した目録などを公開しています。その他、『白石市文化財調査報告書 渡辺家文書 現況目録』や『福島県石川町史資料目録』のような刊行された目録に加え、白石市図書館や山形大学附属博物館については両館のホームページで目録を公開しているため、そのリンクを掲載しています。

デジタルコレクションでは、各資料群のなかから選りすぐりの資料を紹介しています。【写真】のような画面でご覧いただけます。加えて、これらの資料を活用した研究も進めています。「岩沼市安部家文書」については、鈴木淳世「【資料紹介】岩沼市安部家文書の可能性－人物紹介も兼ねて－」（『歴史資料学』第2巻第2号）にて掲載画像が取り上げられています。その他、「（仙台藩）山林方行事」は『別冊史の杜』No.10、「大河原町金ヶ瀬村役場文書」は「文化財企画展 大河原町の歴史資料」（2022年10月21日～23日開催）、「加美町教育委員会所蔵北家文書」は「講座：地域の歴史を学ぶ◎加美」（2023年12月10日開催）のように、刊行物や展示、講演会などで研究成果を公開しています。

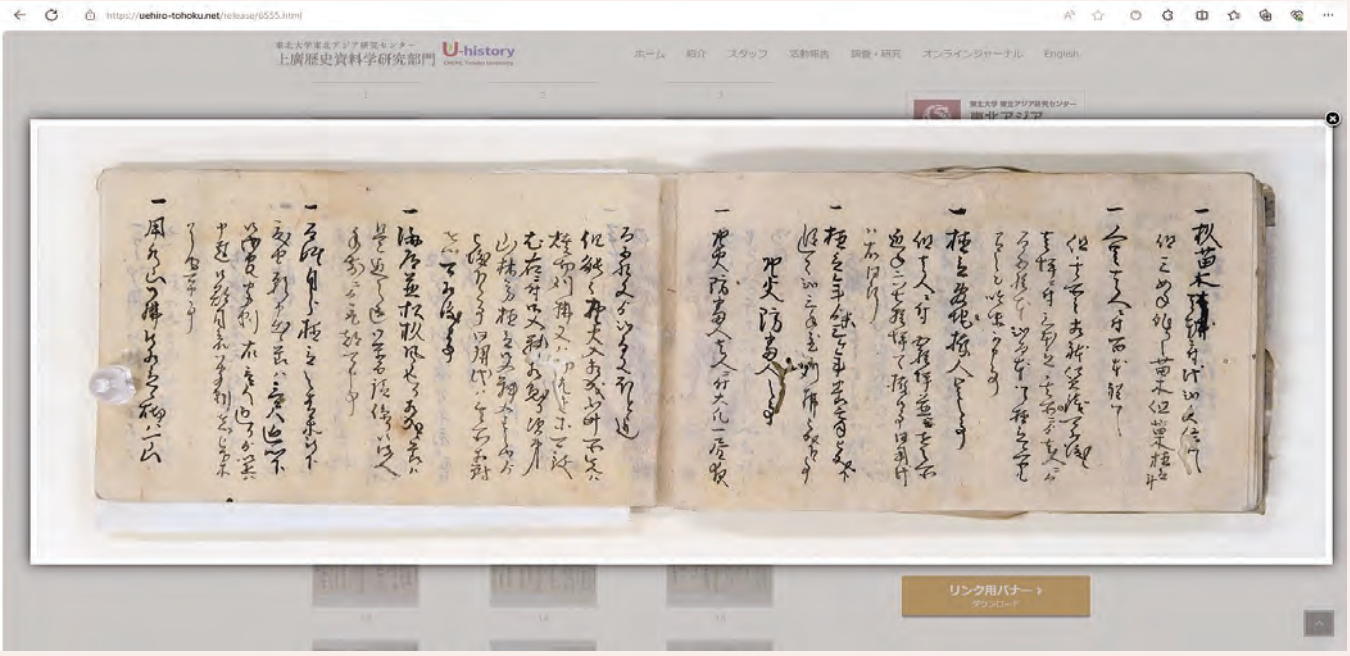
部門では資料の撮影や目録作成に鋭意努めています。資料の魅力を知っていただくべく今後も公開情報を充実させていきますのでぜひご活用ください。

（竹原万雄）

【表】ホームページで公開している資料目録・デジタルコレクション

県	市町村	資料群・刊行物等	公開情報
宮城	岩沼市	岩沼市安部家文書	目録(740)／DC(12)
	大河原町	大河原町金ヶ瀬村役場文書	目録(554)／DC(10)
		大河原町高忠文書	目録(2,568)
	加美町	加美町教育委員会所蔵北家文書	目録(482)／*DC(51)
		加美町奥山家文書デジタルコレクション	掲載リスト(6)／DC(6)
	白石市	白石市一條家文書	目録(497)
		白石市米竹家文書	目録(108)／DC(22)
		『白石市文化財調査報告書 渡辺家文書 現況目録』(1~5)	刊行目録
		白石市図書館収蔵資料目録 改訂版	ホームページのリンク
	山元町	山元町歴史民俗資料館所蔵坂元村記録	目録(152)／DC(5)
	利府町	利府町教育委員会所蔵小野家文書	目録(1,023)／DC(3)
福島	石川町	『福島県石川町史資料目録』(1~15)	刊行目録
	須賀川市	須賀川市立博物館所蔵桑名家文書	目録(1,559) ／DC(5)
		須賀川市立博物館小針家文書	目録(121)
		須賀川市立博物館廣田家文書	目録(524)
		『須賀川町会所史料目録』	刊行目録
山形		山形大学附属博物館 古文書史料目録	ホームページのリンク
部門所蔵		青根御湯浴之記	DC(1)
		奥陽軍秘録八（写本）	DC(1)
		（仙台藩）山林方行事	DC(1)
		伊達郡掛田村桑嶋家文書	目録(29)／DC(29)

※「公開情報」欄の「DC」はデジタルコレクションの略。「(　)」は掲載している資料の件数。
*「加美町教育委員会所蔵北家文書」については、東北大学東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ（https://archives.cneas.tohoku.ac.jp/collection/kitake/search）にて公開。



【写真】「デジタルコレクション」資料表示画面

上廣歴史資料学研究部門
2023年1月～12月

古文書目録作成・撮影作業

石巻市住吉勝又家資料、岩沼市安部家文書、大河原町大泉家文書、大河原町金ヶ瀬鈴木弥五右衛門家文書、大河原町金ヶ瀬村役場文書、大河原町佐藤源之家文書、大崎市加藤家文書、大崎市武藤家文書、加美町奥山家文書、加美町塩澤家文書、白石市米竹家文書、白石市渡辺家文書、仙台市龍寶寺文書、山元町歴史民俗資料館所蔵資料、「(仙台藩)山林方行事」[部門購入資料](以上宮城県)、朝日町鈴木清助家文書(山形県)、須賀川市安藤家文書、須賀川市遠藤家文書、須賀川市相楽家文書、須賀川市藤井家文書、須賀川市矢部孝雄家文書、福島市佐藤和子氏所蔵文書、伊達郡掛田村桑嶋家文書[部門購入資料](以上福島県)

古文書解読講座

- 岩出山古文書を読む会・火曜教室(協力:部門、毎月2回、於大崎市図書館)
- 大河原古文書サークル(主催:部門、毎月1回、於大河原町中央公民館)
- 川北古文書学習会(主催:部門、学期中毎週木曜、於東北アジア研究センター)
- 白石古文書サークル(協力:部門、毎月1回、於白石市中央公民館)
- 仙台藩宿老後藤家文書研究会(協力:部門、毎月1回、於美里町近代文学館)

企画展示

- パネル企画展「片倉氏と江戸時代の白石城」(主催:部門・白石市教育委員会、10月6日～12月20日、於白石城・白石城歴史探訪ミュージアム)
- 文化財企画展「佐藤屋の歴史資料と所蔵の品々」(主催:部門・大河原町教育委員会・佐藤家住宅保存会・佐藤屋プロジェクト、後援:大河原町・大河原町文化協会・大河原町観光物産協会・河北新報社、10月13日～15日、於大河原町中央公民館)
- パネル展示「侍たちの江戸時代－仙台藩の組織と政策－」(主催:部門、11月2日～29日、於仙台市営地下鉄東西線国際センター駅)

講演会・セミナー

- 令和4年度博物館講座⑥　野本禎司「出羽国村山郡における旗本知行の特徴－3000石高力家の領主支配－」(主催・会場:山形県立博物館、協力:部門、1月21日)
- 上廣歴史文化フォーラム:多面性を持つ近世白石商人－渡辺家文書の調査から－　野本禎司「天保期の渡辺家と片倉家・仙台藩」、荒武賢一朗「幕末期における商家経営と人的諸関係」(主催:白石市・白石市教育委員会・白石市文化財愛護友の会・公益財団法人上廣倫理財団、後援:文化庁・宮城県教育委員会、2月11日、白石市中央公民館)
- 令和5年度博物館講座①　竹原万雄「近世村絵図を読み解く－村山郡寺津村(現・天童市寺津)を中心として－」(主催・会場:山形県立博物館、協力:部門、6月10日)
- 大河原町文化財講演会　佐藤源之「文化財保護からウクライナ地雷除去への技術」、荒武賢一朗「5代目佐藤源三郎と地域社会－明治・大正の大河原－」(主催:大河原町教育委員会、10月14日、大河原町中央公民館)
- 第5回みちのく歴史講座:侍たちの江戸時代－仙台藩の古文書分析－　野本禎司「仙台藩宿老の政治的役割－後藤家文書の調査から－」、荒武賢一朗「一門衆の組織と運営－岩出山伊達家の事例から－」(主催:部門、11月11日、東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟)
- 令和5年度選べる!すかがわ歴史講座(第4回)　荒武賢一朗「須賀川郷士 相楽家の由緒と社会活動」(主催:部門・須賀川市立博物館、11月25日、須賀川市立博物館)
- 講座:地域の歴史を学ぶ◎加美　J. F. モリス「「菜切谷村他三箇村絵図」の謎を読み解く－仙台藩4代大名綱村の時代への覗き穴－」(主催:部門・加美町教育委員会・東北大学東北アジア研究センター共同研究「仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究」、12月10日、加美町中新田公民館)

出　版

- 野本禎司・南郷古文書を読む会編『仙台藩宿老後藤家文書－由緒・職務・武芸－』(東北アジア研究センター叢書第72号、1月)
- 荒武賢一朗・武田作一編『文政10年東北農村の御用留－須賀川市桑名家文書から－』(東北アジア研究センター叢書第74号、12月)

共同研究

- 「仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究」(東北アジア研究センター、研究代表者:荒武賢一朗)
- 「歴史資料学の実践－福島県須賀川市の地域史研究－」(東北アジア研究センター、研究代表者:荒武賢一朗)
- 「近世東北アジアの交流と情報」(東北アジア研究センター、研究代表者:荒武賢一朗)

オンライン・ジャーナル『歴史資料学』第2巻第2号

- 鈴木淳世「【資料紹介】岩沼市安部家文書の可能性－人物紹介も兼ねて－」(3月31日)

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニューズレター
史の杜 FUMI no MORI No.13

■ 発行日／2024年2月15日
■ 編集・発行者／東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門
■ スタッフ／部門長:柳原敏昭　教授(副部門長):荒武賢一朗　助教:竹原万雄・根本みなみ
■ 〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内41番地　Tel/Fax022-795-3140
■ URL　https://uehiro-tohoku.net/
■ デザイン・印刷／今野印刷株式会社